

佳作

テーマ：誰かのために、わたしができること 「小さな家族からの贈り物」

岐阜県立飛騨高山高等学校1年 平澤 怜奈

「死にたい…助けて…」毎日ペットの猫に呟く私の言葉。精一杯の SOS 信号。当時、小学六年生だった私はクラスでイジメにあっていました。それも一年生からずっと。いつの間にか「私は必要とされていない…命なんてどうでもいい…」と考えるようになり、やる気も出ず、悲しくて辛い毎日を送っていました。その中で唯一私を癒してくれたのがペットの猫。名前は「みゆう」。私が生まれる前から我が家にいた大切な家族です。私の悩みをいつも聞いてくれました。みゆうといると落ち着いていくのを感じました。

しかし、十数年生きた老猫の体に限界が来ました。いつも帰ってくと出迎えてくれるはずのみゆうがいません。「ちょっとみゆうの様子がおかしいので病院に行くよ」。ぐったりとしていて、車の中で苦しうに息をするみゆうに、「お医者さんにみてもらえば良くなるから頑張れ！」と声をかけ続けました。

動物病院で診察をしたらうと、先生が、「糖尿病の末期症状です。残念ですが、そう長くは生きられないでしょう。安楽死という選択がありますか…どうされますか」。そう告げられました。「安楽死」という言葉が頭の中でぐるぐる回り続けました。安楽死させればもう苦しまずにすむ。でも、みゆうはどうしたいのだろう。その時、みゆうと目が合いました。その瞳は「まだ生きたい」と言っているようでした。そして家族の意見は一致しました。「安楽死はさせません。どうか助けてあげてください」。先生にお願いして、数日間、病院に預けることにしました。

次の日からみゆうがいない生活が始まりました。毎日のように死にたいと言っていた私は、このことがあってから全く言わなくなりまし。それから一〇日間ほどの入院で少し元気になったみゆうですが、

毎日のインスリン注射と水分補給のための点滴を続けることになりました。私たちも大変でしたが、みゆうはもつと辛かったと思います。三か月ほどたった時、みゆうは再び調子が悪くなり入院しました。そしてある朝、母が病院からみゆうを連れて帰ってきました。みゆうの姿は前と変わらず弱々しかったですが、とても嬉しそうでした。しかし、その二日後にみゆうは生涯を終えました。涙があふれて止まりませんでした。けれど、みゆうはとても安らかに悔いのないように見えました。

みゆうは家の敷地内に埋葬しました。愛しい家族の死を受け入れなければならなくても、受け入れられない自分がいました。その時、私は知りました。「死」とは今まで愛してくれただすべての人が悲しむことなのだ。生きたくとも生きられない命があるのに、「死にたい」と言っていた自分が恥ずかしくなりました。そして、生きていることがどれだけ大切で素晴らしいことなのか気付きました。

その後、中学に進学し、たくさん友達が出来ました。しかし、辛いことがあると、自分の命なんてどうでもいいと簡単に言う友人もいました。みゆうの出来事以来、自分の命だけでなく、家族や友達、他人やそのペットの命まで大切にしたいと思うようになった私は、まわりの友達にも「命ってとても大切だよ。生きているって素晴らしいことだよ」と伝えるようにしています。

私はみゆうに命の大切さを教えてもらいました。どんなに苦しいことや辛いことがあっても、決して「死にたい」なんて言うてはいけない。生きたくとも生きられない人もいるのです。命はいつか必ず鼓動を止めます。その運命の時間を自分の手で早めないように、『命の大切さ』をたくさんの人に伝えていきたいです。

私は将来、動物と触れ合うことで人の心を癒すアニマルセラピストになりたいです。そのために、現在は動物物について学ぶことが出来る飛騨高山高校生物生産科で、夢を叶えるために頑張っています。私がみゆうから勇氣や生きる希望をもらったように、私も苦しんでいる人を勇氣づけられる人になりたいと思います。